

シュナイダーのフランチェスコ －歴史のなかの場所－

神 谷 裕 子

はじめに

1. 聖人の風景
2. 連作としてのフランチェスコ
3. 変 化

おわりに

はじめに

中世イタリアのアシジに生まれたフランチェスコ(1181/1182～1226)は、カトリック教会で「最もイエスに近づいた人」とも言われる聖人である。生存中から彼の「小さき兄弟会」の会員は数千人を数え、国境をこえてヨーロッパ全土の半分にまで拡大した。そして死後わずか1年半にして、1228年7月には聖人の座に列せられている。

フランチェスコは自身でいくつかの文書を残した。彼に関してほかに伝記をはじめとするかなりの史料があり、その解釈や歴史的な位置付けについての研究者の論争は、いまだ決着を見ていない。学問的研究にとどまらず、彼は様々な分野の芸術家たちを刺激しつづけてきた。現代にいたるまで、音楽・絵画・彫刻・映画などに、数えきれないほどの彼を題材とした作品がある。文学者たちもその例にもれない。現代ドイツ文学のなかでは、ヘルマン・ヘッセ、ライナー・マリア・リルケ、イーナ・ザイデル、ネリー・ザックスらとならび、ラインホルト・シュナイダー(1903～1958)も彼を描いた作家の一人であった。

フランチェスコの言葉やユニークな生き方は、くりかえし新たな視点からの解釈を可能にしている。現代も、キリスト教の枠をこえる多元的な霊性、自然と人間との共生、平信徒、とくに女性の役割評価など、いくつもの視点から読み直すことができよう。彼は、社会の現実を打破するオルタナティブな存在と言えるからだ。作家たちは著作のなかで、聖人の人間像とともに、彼のもつ意味を提示してきたのだ。シュナイダーも25年以上の長きにわたっ

て、幾度も彼について書き綴っている。その間のドイツは、二つの世界大戦を引き起こして敗北し、国が分裂したうえに東西対立の前線になるという、史上類を見ないような激動の渦中にあった。

シュナイダーは20代後半に作家として自立して以来、つねにドイツの歴史とともに歩んできた¹⁾。とくに1930年代のなかば頃にカトリック信仰に回帰してからは、自分がペンによって時代と対峙していることを自覚していた。平穏な日々はわずかしかなかった。インフレや不況のなかの生活苦、第2次世界大戦中のいわゆる「国内亡命」をからくも脱すると、戦後には東独の雑誌に投稿したことから誤解を受け、教会・メディアの集中砲火に直面している。それぞれの実存的な体験は、彼の描くフランチェスコ像に反映しているのだろうか。

以下に取り上げるシュナイダーの作品は、聖人が登場するという共通点を除くと、ジャンルも視点も異なっている。本論の目的は、各作品からフランチェスコ像を抽出し、それを分析することによって、この聖人を通して見えてくる作者の思想の変遷をたどることである。

1. 聖人の風景

フランチェスコとその同時代人である教皇インノケンティウス3世（在1198～1216）によせるシュナイダーの関心は高く、「人生のもっとも長い道のりをともに歩いてきた」と述懐するほどであった²⁾。この言葉通り、彼は生涯にくりかえし聖人とその世界について語っている。本論では作品群を大きく二つに分け、作家としてまだ駆け出しだった1930年代はじめから第2次大戦さなかの1942年までに書かれた三つの作品を見ていくことにする。

ここに扱う作品のほかに、戦後すぐに「フランチェスコ的なクリスマス（1945）」³⁾がフライブルクの教会誌に、翌年には「聖フランツィスクスとヨーロッパ」を収める評論集『火のなかの遺産（1946）』⁴⁾が出版された。1952年の戯曲「イノツェンツとフランツィスクス」⁵⁾は、戦後に書かれた聖人にかかわる作品のなかで、とくに注目すべきものであろう。ドラマは54年2月、西ドイツ大統領ホイス臨席のもとエッセンのオペラハウスで初演され、全部で21回の上演を数えた。同会場でもっとも成功した作品の一つになったということである⁶⁾。シュナイダーが解説を付けた写真集『フランツィスクス』⁷⁾は53年と56年に出版になった。さらに聖ボナヴェントゥラ作の『アシジの聖フランツの生涯（1956）』⁸⁾には序言を書いている。これらの作品は次の機会に譲ることにしたい。

以上あげた出版物から、シュナイダーの聖人に寄せる関心の深さを実感することができるだろう。また彼が聖人に託した言葉が、戦中戦後と連続して読者に広く行きわたっていたことも事実である。

2. 連作としてのフランチェスコ

2.1 「アシジ」（1931）⁹⁾

シュナイダーがフランチェスコに触れたもっとも古い作品として、聖人の生地を訪れたさいに書かれた「アシジ」と題するエッセイがある。イタリア各地についての旅行記からなる

連作の一章である。のちにほかのヨーロッパの国々(スペイン・フランス・イングランド・スウェーデン・ドイツ)における同種の作品とともに、『歴史と風土』と題して死後(1960年)に出版された。

「アシジ」の末尾には1931年5月28日の日付があり、執筆は作者がキリスト教に心的なかわりをもたなかった時期にあたる。当時の日記(31年4月1日)には、「キリスト教はわたしにとって、純粋に歴史的な問題である」¹⁰⁾と記されている。アシジの約2ヶ月前(31年3月29日～5月1日)にはローマに滞在し、日記には数十頁を費やして、この永遠の都についての感想や分析が書き連ねてある。

ちょうど復活祭のときであった。巡礼者にまじってヴァチカンを見学する彼の目は冷やかである。柱廊に並ぶ聖者像に対し、「それらが指し示そうとするのは、過ぎ去ったもの、ひょっとしたらこれまで一度もこの広場を横切ったことのない何者か」であるとし、「たいてい信ずるに足らず」、聖者像の身振りさえ「空疎(361)」であると断じている。

聖人であるフランチェスコの故郷にも、シュナイダーはそれほど深い思い入れをもっていない。「アシジ」のなかで、この町と自分自身の故郷であるバーデン地方の風景とのちがいを牧歌的に描くのは、あくまでも旅行者の視線によってである。聖クララ修道院ではのどかさを強調するように、修道士のいない昼食の用意が整った食卓が描写され、そこに鐘の音だけが渡っていく。作者はこうした一見何気ない場面から入っていくことで、聖人の「偉大なるものへの、実現不可能なるものへの最初の一步」が、「ごく身近な狭い日常の現実のなかでおこった行為(289)」であることを、読者に想起させる。しかしここは、フランチェスコが主の命令——教会の再建——を聞き取った、記念すべき場所なのである。この食堂で奇跡が起こったのだと、直後に修道士が語ることによって、日常から超越への飛躍があざやかな印象を残す。

注目されるのは、「アシジはエルサレム以上である(291)」というシュナイダーの発言である。エルサレムはあまりに整備されているため、そこにあふれる奇跡物語は、聖地の周辺を離れると信憑性を失うのに対し、アシジには聖人の見出した自然と風土が、今もなお息づいており、そこに作者はより強いリアリティを感じているのである。

宗教都市ローマに対する批判的な姿勢は、「アシジ」にも続いている。なぜなら聖人に下った「わたしの教会を再建せよ」という主の言葉は、実はローマに向けられたものだとして作者は解釈するからである。インノケンティウス3世のもと教皇権が最高潮に達したこの時代に、キリストから受け継いだ遺産(フォルム)が危機に瀕していたという認識である。各地に「思い悩む異端者たちの試行錯誤や権力者たちの歪曲」があり、「流れ去る時代の影が深まるばかりのなか、キリストの姿は徐々に遠ざかっていった」という時空間。ここにもシュナイダーに特有の光と影の対立がある¹¹⁾。この影が教皇権に集約されるなら、アシジはローマのアンチテーゼとなる。聖人の実践した「真にキリストに従う生き方」は、「ローマに対するこれ以上ないほどの激しい攻撃(290)」だからである。

フランチェスコは必死になって、「弱まりゆく光を取り戻し、歴史を歩む者たちの身近に再生させようとした(290)」。彼の努力は功を奏したのだろうか。聖人をかこんで成立した共同体は、規模が拡大すればするほど、創立者の理想とする清貧をゆるさなかった。会の発

展とともに次々と譲歩を迫られ圧倒されることは、フランチェスコの「最後にして最大の殉教」になった。晩年に彼を隠遁へと導いたのは、原点にあった「独りでいることの幸福(293)」である。

故郷の町はいつのまにかフランチェスコの手から滑りぬけていた。シュナイダーの眼前には、聖人の歩いた自然ではなく、都市となった現在のアシジがある。そこに聖人の粗末な小屋はなく、ヴァティカンを思わせる丸天井がそびえている。聖人として彼はキリスト教にとって不滅の存在になった。しかし「アシジ」末尾の聖人は思いに沈み、もの問いたげに見やっている。「もう一度キリストに続くことが人々を誘い動かし、偉大なる運命が再び現実のものとなるかどうかは定かでない(240)」のである。

ローマに対抗し、イェルサレム以上でさえあるというアシジは、シュナイダーにとって懐疑のなかにある。

2.2 『イノツェンツ3世』(1931)¹²⁾

シュナイダーが得意とする、詩を思わせる荘重な調子で書かれた散文作品である。作者がエピローグに解説しているところによると、この作品はきわめてヨーロッパ的な対立、すなわち教皇と皇帝の対立にひそむ内的現実を題材としたものである。史実にもとづきながら、記録が及ぶことのできない領域に、物語が展開している。象徴的な表現には多義的な解釈が可能になる。

神より小さいが人間よりも偉大であるという、歴史上比類ない地位に昇りつめた教皇インノケンティウスの生涯、その軸には、彼と神聖ローマ帝国の皇帝たちとの権力闘争があった。主人公は権謀術数をつくして皇帝に対する勝利をおさめていくが、実は両者ともに悲劇的な布置から逃れることはできない。頂点に達するその道の先には没落が待ち受けている。

フランチェスコは重要人物の一人だが、登場するのは2ヶ所しかない。はじめが、第2部「二つの剣」のなかの第2章「二重の戴冠」にある短い段落である。彼はアシジの近郊を通る皇帝オットーのもとにみずから出向くことを断り、かわりに弟子を使いを送る。あらゆる栄華のはかなさを語る聖人の言葉は、武装した皇帝の軍勢も教皇の歩みも、止めることはできなかった。自分の居場所を去らず、俗界とは一線を画すフランチェスコがそこにある。

ついで第3部「イェルサレム」の第1章「聖人と教皇」では、1章すべてが二人を描くことにあてられる。全体はフランチェスコの夢ではじまり、インノケンティウスの夢で終るといふ、夢を媒介とする枠構造になっている。その間に個人の歩みが、聖人・教皇の順に概観される。構成からも明らかなように、この章全体のテーマは二人の対比である。

冒頭、教皇から会則の許可を得ようと、フランチェスコがローマに赴く途上でみた夢のなか、「完全な美そのものである、一本の巨大な樹木があらわれる」。彼はただ畏れをこめてその木を眺めるしかない。「だが感嘆するうちに、彼は自分の背が伸びるのを感じ、その枝に触れられるほどになった。樹木のほうも彼に向かってやさしく枝を傾けてきた(103)」。聖人の存在の大きさが、この夢に象徴的に表現される。

続いて、フランチェスコが教皇に謁見する場面には、二つの異なった伝承が並ぶ。そのうちの后者、聖人は教皇の面前にきわめて粗末な服装であられるほどの誇りをもち、教皇は

そうした彼に激しく立腹し非難をあげるといふ、一般に流布する対面の場面よりもはるかに生々しい感情の衝突するこの伝承を、「事実ではなくともおそらく真実をあらわしている(103)」とシュナイダーはとらえる。作者にとってフランチェスコは、「傍若無人なまでの」改革者である。ここで対峙するのは「組織と自由、避けることのできない老いと魂の若さ、分裂した心と確信そのもの(105)」であり、三つの比喩は二人の違いを明示する。

中間部にあるフランチェスコの個人史、彼が「憑かれたような衝動」に駆られ、キリストのまねびを實踐する、その激しさ。短いセンテンスの連なりが、「アシジ」のもつ旅行記風の穏やかさと対照をなす。この文体はまた、聖人のもつ「破壊的な本性」を際立たせるものである。

会の拡大で、逆にフランチェスコは拘束される。やがて「この仕事はもう彼のものではない、教会がほとんどキリストのものではないのと同じように(106)」。拘束から逃げ、孤独のうちに帰天を目前にして、彼はついに「苦しみと幸福の一致(107)」を感じる。これが彼の到達した最後の段階であった。

インノケンティウスも個人と組織との関係に苦しんでいる。権力を確立し、教会は一つの国家になった。しかし彼は夢のなかでも安んずることができない。フランチェスコの精神が彼の成し遂げたことに「否(ナイン)」をつきつけ、夢のなかで彼はそれを感じ取る。しかし「この短い夢のときが終れば、あの完成者の眠る聖域を…組織の中に組み入れるのは教皇の務めである(108)」。聖人を組織に取り込むこと、その結果が、あの「アシジ」に見られる壮大な伽藍なのである。

この作品について原稿審査員のヤーコプ・ヘーグナーは、「(シュナイダーの)テーゼはきわめて非カトリック的であり、彼のメタフィジックな確信があまりに現実的なものになっているため、テーゼもアンチテーゼもともに没落を運命付けられているような、現世的な二元論に陥っている」¹³⁾と作者に書き送っている。

2.3 『アシジの聖フランツのとき』(1942)¹⁴⁾

巻末のリストによると、シュナイダーはチェラーノのトマス、ボナヴェントゥラ、さらにヨルゲンセンまで、主だった聖人伝を含む十冊以上の文献を参照したうえでこの作品を書いている。前2作から約10年の月日が流れていた。30年代の半ばごろ、シュナイダーは幼児洗礼を受けたカトリックの信仰に立ち戻っている。1939年に勃発した第2次世界大戦は、日を追うごとに多大な犠牲を生んでいた。ドイツでは開戦時にあった熱気はしだいに薄れ、戦争経済をまかなうため、国民全体をまきこむ総力戦の様相を呈するようになる。41年6月にソ連に侵攻したドイツ軍は、42年10月にレニングラードを占領し独ソ戦最大の勝利をあげるが、決定打にはいたらなかった。43年1月末にスターリングラードで大敗を喫してからは、坂道をころがるようにドイツは崩壊していく。

くりかえしシュナイダーは、彼の活動にとって1942年が重要であったことを述べている¹⁵⁾。ソネット、宗教的考察、小説は大きな反響をよび、それに比例するかのよう当局の妨害が激しさを増した。「わたしは自分の目標を確信しているが、印刷許可のことはもう考えられなくなっている」¹⁶⁾と彼は述べている。物資も不足した。困難をきわめた状況のなかで、用

紙を調達し、占領下のフランス、コルマルで印刷を請け負った友人たち、ポーランドでひそかに作品をまとめ配布した無名の従軍司祭。彼らの働きなくして、シュナイダーの作品はこれほど流布しえただろうか。前線の兵士をはじめ、読者からの感謝の手紙が洪水のように作者のもとに寄せられた。戦後彼はこのころのことを回想し、「ほとんど大それた、とも言える未来への信念がわたしを包んでいた。神のみもとに帰る国民を、本当に目にしているのだと信じていた」と記している¹⁷⁾。本書は1942・43年に、さらに戦後にも1946・48・56年と版を変えて出版された。当時の状況を考えると、広範な受容があったと言えるだろう。

本書では、フランチェスコの生涯と信仰が3章に分かれて描かれている。執筆にあたり、シュナイダーは二重の意味で稜線を歩まねばならなかった。彼の作品を待ち望む読者を意識しつつ、自分の文学を守ること、さらに当局の目を逃れるために外見を装い、直接的な文言を避けねばならなかったことである。

2.3.1 第1章「歴史への道」

「歴史への道」と題された第1章ではまず、「諸民族の群れにまじり、聖人たちも歴史の道を歩む(5)」という作品全体の構図が俯瞰される。全体を通して、主人公は一般人とはかけ離れた存在である。人々の群れにあって、みすばらしい姿でありながら「自由のもつ幸福」を宿す男、人々の生き方をまったく変えてしまうようなカリスマを持つ人物として登場する冒頭の場面から、それが強く打ち出されている。

歴史上イエスの生きた清貧は多くの心をとらえてきたが、実際にそれを実践することはきわめて困難であった。異端に陥る誘惑と危険はいたるところにあった。二つの相対する力が競合しつつ歴史を動かしていくという作者の歴史観が、ここに提示される。

しかし二つの力は単に敵対するだけでなく、人智をこえて絡み合い、歴史の深部に思いがけない作用をおよぼす。その結果、意に反して悪は救いに貢献してしまうことになる。あたかも現実の出来事には表に見えない底流が付随する実例のように、皇帝と教皇との暗闘とフランチェスコの成長が、並行して描かれていく。

彼ははじめ、栄光ある騎士にあこがれるような、当時の一般的な若者であった。いさんで出征した都市間の戦争で捕虜になり、さらに病を得て、少しずつ心の変化を感じるようになる。変化は彼の耳に聞こえる内心の、あるいは清貧という婦人(Frau Armut)に擬人化された声を通して意識化される。決定的な瞬間は、崩れた教会で祈るフランチェスコに、十字架像からの声がとどいた時だった。彼のつかんだ二つの任務は、教会を再建することと、「自分の生涯から聖なるもの(ein Heiligtum)を作り上げること(18)」である。そして「主があまり彼の近くに來られたので、彼はキリストの受難を自分自身の身体で完遂せずにはいられなかった(18)」。ここで彼は、ただちに自分の使命を敷衍化することができ、神の臨在を経験した恐れや喜びよりも、主の受難を第一に思い浮かべるような思弁的な人物に造形されている。また回心の瞬間から、晩年に受ける聖痕(スティグマ)が予定されていたことになる。

フランチェスコは世俗の生活を捨て、教会の再建に励み、彼に従う仲間が日増しに増えていった。やがて弟子の一人が見た夢のなか、フランチェスコの口から出た十字架が成長し、

先端は天に、横の梁は地の端から端にとどくまでになる。前作『イノツェンツ3世』ではフランチェスコ自身が類似した夢を見ていた。前回のように大樹のとなりで彼が伸びていくのではなく、ここでは彼自身が十字架を生み出しており、彼の宗教的な意味がいっそう明白である。さらに夢を見る主体が弟子に変わることによって、会の発展が全世界におよぶことを、個人的にはなく他者が感じ取るものになっている。

歴史的にはこの間にドイツの国内は分裂、そこに教皇が介入し、権力闘争がめまぐるしく続いていた。かつてフランチェスコは騎士としての出世を望んだが、「恵みの声が、彼を戦いの場から孤独のなかに呼んでいた」ので、すでに世俗とかかわりを捨てていた。その声によって彼は騎士の武器を捨て、「この世のものではない(26)」栄光をめざした。彼が「歴史への道を歩む」のは、このようなあり方である。

中世盛期のこの時代、人々は主に頼みながら、ひどい失望を味わっていた。フランチェスコとその仲間たちは権力者たちよりもずっと強く、その痛みを感じ取っていた(28)。彼らは「神の国の担い手」であり、「神の国は歴史が続く限りたえず敵と戦いながら、今このときも近づいているのである(27)」。フランチェスコの一派は歴史のなかで相対化され、彼らの働きは歴史上のどの時代にも重ね合わせることができるようになっている。

2.3.2 第2章「生のかたち (Forma vitae)」

第2章ではフランチェスコの生涯の中期、会の創設と聖痕を受けるまでを描いているが、中心になるのは彼の信仰のあり方を語ることである。

会則について簡単な説明があり、第2会則のはじめに福音書から4ヶ所が引用されている。福音書の言葉を守ることだけがフランチェスコの生き方であった(33)と言うが、それはいかにも苛酷な要求であった。彼があくまで福音書の教えを貫くことを作者が強調すればするほど、彼は「特別な存在」となる。フランチェスコとイエスの類似が様々な角度から語られ、「彼は救世主に達し、主とともに世界の中心にあった(56)」と言われるほどの位置に上っている。

フランチェスコは鳥、花、虫のような生物だけでなく、森羅万象のすべてに愛情を寄せ、被造物のほうも彼に信頼を寄せ従った。その説明として、「彼の純粋さのうちに、肉体が精神と、精神が神と奇跡のような調和に達していたために、神に心服する被造物は、神意によって聖人の意思と命令に従うという、靈妙なることになった(56)」というボナヴェントゥラの言葉が引かれている。ボナヴェントゥラの『大伝記』はいわば聖人の公式の伝記であり、彼の平和的側面と聖性が強調されたものである¹⁸⁾。

シュナイダーはフランチェスコにもっとも特徴的な徳として、キリストへの従順をあげる。彼のみならず「弟子たちにも心の純粋さが身につけていたので、心的な分裂を知らなかった(34)」。団結と従順が強調され、とくにフランチェスコの従順の姿勢は、本書の他の箇所でもくりかえし言及されている。しかし会がヨーロッパ中に拡大するようになると、彼は会の指導を辞退し、自分を死んだ者だと宣言して上長の位を譲った。兄弟を指導するより従順を重んじることを、身をもって示したと言える。

しかし組織の急激な拡大は、団結心と従順だけで乗り切れるものではなかった。フランチェ

スコは従順の模範として遺体をあげているが、もはや遺体のように意思のない存在でなければ、急激に発展した会を維持するのは難しくなっていた。現実には意見の相違があり、善意からの周囲の干渉に立ち向かわなくてはならなかった。

比類ないカリスマがありながら、自分の願いを抑えて上長に従う彼は、「兄弟の誰よりもへりくだった態度を示した(50)」。パラドックスを視覚化し、彼の持つ聖性を象徴するのが、フランチェスコが身に帯びた聖痕であろう。「彼の生のかたちがキリストのそれになった(63)」証しであり、彼の生の究極のかたちとして、聖痕は第2章の最後に置かれている。

2.3.3 第3章「時代のなかの聖人」

第3章では、第1章に述べられた二つの力の戦いと、フランチェスコの大いなる働きが中心となる。その役目とは、「つねに脅かされている世界を守る孤独な番人(64)」である。彼には、市民同士が戦っている都市に悪魔の姿が見えた。ローマで悪霊に襲われたこともある。「恵みの働くところに、デーモンの攻撃はもっとも激しい(65)」とは、第1章に出てきた対立の具体化である。歴史という空間のなか、聖人が一人で戦っていることが読者に明かされる。しかしその戦いに、「われわれはほとんど気づくことはない(65)」のである。

それは現実の場での戦いにも該当する。前作に登場した二つの場面——皇帝のもとに使いを送る・教皇に謁見する——は本書にも取り上げられている。フランチェスコは神聖ローマ帝国皇帝オットーに使いを送り、死を思い職務を果たすよう伝えた。その後「乞食の身なりをした警告者が権力者(皇帝)の心に触れた(rühren)かどうか、われわれにはわからない(68)」。しかし警告は実行に移されなくとも、彼の警告は「真理」であり、「目に見えないところで歴史のなかを進み、静かな、しかし少なからぬ力で目標に触れる(rühren)こともありうる(68)」と述べる。同じ単語を使うことによって二つの文は呼応し、ある影響を暗示していると考えられる。ここで作者は心的な次元のことしか語っていないが、状況によっては、それは現実の効果を生み出す可能性も秘めている。

フランチェスコとインノケンティウスの対面では、教皇は兄弟たちの情熱を理解し、フランチェスコも自分の考えを寓話のかたちで打ち明ける。会則が承認されるか否か、緊張が走るが、枢機卿のとりなしによって教皇はフランチェスコの心に救世主のイメージを見いだす。前作にあった二人のあいだの対立・憎しみ(103)はまったく消え、教皇はフランチェスコのカリスマに圧倒されたかのように、終始無言である。

会は拡大し、各国に会員が送られ、在俗のままフランチェスコの道を歩む人々のためにフランチェスコ会第三会が作られた。しかし組織が広がるほど現世に制約され、集団を秩序づける法が必要になる。会はやがて創立者の意思から離れ、そのことにフランチェスコは苦しむ。殉教を願い異教徒の地を訪れる試みは、三度とも失敗に終わった。

信仰のために自分の身体を顧みなかったフランチェスコは、晩年には肉体的にも激しい痛みにも耐えねばならなかった。耐え難い苦痛のさなか、彼は天の声を聞きとり、創造主と被造物への賛歌が心にあふれる。生涯の最終段階にあって、遺言とも言うべきこの「太陽の歌」では、あらゆる被造物・あらゆる経験が、闇や痛みさえも、神に仕え神を讃えるものとなる。賛美には喜びと痛みの境界はなく、彼の目を傷つけた太陽の光を祝し、死を歓迎する。病と

衰弱のなかからこのように対立をこえた一元的な詩が生まれたこと、それが世界への新しい光になるとシュナイダーは予告する。

フランチェスコは会の行く末を案じたが、天の声が存続を約束する。「かたち(フォルム)は不滅(99)」であった。第2章の答であり、ここに論じた第1作の「アシジ」にあった危惧を覆す帰結である。たとえフランチェスコが帰天しようと、「聖人のときがますます近づいている」ことを、シュナイダーはさまざまな角度から力説する。世の中の火事が財産を呑みこみ、家々が崩れるとき、神無き者が自分の時代が来たと考えようとも、聖人のときは近いのである(100)。教会の壁が本当に崩れてしまいそうになると、そんなときこそ「夜の深い闇に、瓦礫のあいだに乞食の姿があらわれ、滅亡のなかを歩いていけよう」。そして「滅亡の夜が続くあいだにキリストに従う者は、新しい天と新しい地に加わることになるだろう(101)」。これはキリスト者への呼びかけである。新しい天地とはどのようなものか、読者の想像に委ね、第1章にあった主張をくりかえして本書は終わっている。

3. 変 化

ここまで読み進め、最初作品「アシジ」と『イノツェンツ3世』まで描かれた軌跡は、『アシジの聖フランツのとき』の前にとぎれ、作者の聖人像がここにまったく異なる顔を見せていることが確認された。作者の教会観、聖人に対する距離の取り方などの他に、3作目の叙述は、前2作に比べて著しく異なった印象を受ける。その原因はどこにあるのだろうか。

『アシジの聖フランツのとき』の叙述には、とくに第2章には、あるパターンを抽出することができよう。まずフランチェスコの信仰の特徴が、一般の人々のそれとの対比というかたちで提示される。作者がそれを自分の言葉でとらえなおし、その後自説を補強するかのように、聖書の語句が引用される。ここまでは観念的な論考である。これを一つのまとまり(単位)とし、次に作者の視点がフランチェスコの信仰のもたらした結果に移り、聖人の周辺で具体的にどのようなことが起こったかを述べることになる。現実との接点なので、この部分には逸話が多く登場する。このパターンに従い、フランチェスコの信仰を核とする同心円が広がっていく。このような構造の反復が見いだされるならば、それは文学作品というより宗教的なパンフレットに近づいていけよう。

前2作になく本作にのみ登場する「われわれ(wir)」を主語とする文は、そのつど読者を歴史上のある地点に導き、省察を促す。シュナイダーの主人公がみなそうであるように、フランチェスコは選ばれた孤高の存在である。彼自身が炎となり、わが身を燃やして(78)世界に平和をもたらそうとする。シュナイダー特有の悲劇的世界観と異なるのは、主人公にあらかじめ没落が運命づけられておらず、われわれの知らない所で目に見えない働きをおよぼし続けていることである。作者が中世盛期の時代と聖人に仮託しながら同時代の読者(wir)に送ったメッセージとして、受けとめることができるだろう。

おわりに

『アシジの聖フランツのとき』はシュナイダーの「国内亡命」の産物である。フランチェスコを現実に生きた人間としてよりも、信仰の模範として描くことが、作者の主眼であった。彼の生涯の出来事は時系列に並んでいないし、年月や期日もほとんど記されていない。ヨルゲンセン¹⁹⁾や最新のフルゴーニ²⁰⁾の聖人伝と比べれば、一般的な聖人伝との違いは明白である。読者は本作に、聖人伝というよりも作者の個人的な信仰告白を見るかもしれない。

誤解してならないのは、シュナイダーがこのとき、自分の役割を自覚していたことである。遺作になった『ウィーンの冬 (1958)』のなかで彼はこの時代のことを、「宗教的な救護の任務に従事し、宗教的な小冊子を世に出して、わずかばかりの文学的な名声——文学的な高慢さも含め——を損なうことを、決して恥じなかったころ²¹⁾と回想している。またやはり戦後の書で、「わたしは国民と一緒に生きることしかできない。わたしは彼らの歩む道と一緒に一歩一歩歩きたいし、歩かなければならない。思想の理由から亡命する人たちを大いに尊敬するが、わたしはドイツを去ろうと考えたことは一度もなかった。さらにまた、独裁のもとにある国民に対して国外から精神的な働きかけをするのは、ほとんど不可能だということがわかった」とも述べている²²⁾。彼は作品の向こうにいる戦時下の読者たちを忘れたことはなかった。

ここで語ったことが救護兵シュナイダーのぎりぎりの稜線であった。フランチェスコの平和は「この世のものではな (89)」く、彼の本質が従順にあることを、作者はくりかえしている。しかしこれさえも許されない事態は近づいていた。当局からは度重なる家宅捜索や聴取があった。シュナイダーが大逆予備罪で起訴されたのは、本作発表の翌年である。

〈注〉

- 1) シュナイダーの履歴については、これまでたびたび述べている。
「償いは果たされるか —ラインホルト・シュナイダーの『タガンロク』—」
『ドイツ文学研究』第33号所収 2001年 日本独文学会東海支部 S.149 f.
「別離の幸福 —ラインホルト・シュナイダーの『バルコニー』—」
『中京学院大学研究紀要』第12巻所収 2004年12月 S.36ff.
- 2) Schmitt, Franz A. (hrsg.): Reinhold Schneider. Leben und Werk in Dokumenten. Olten 1969 S.195 以下本書をLWと略記する。本論では、書名以外聖人の名をフランチェスコ、教皇の名をインノケンティウスで統一する。
- 3) Franziskanische Weihnacht. (15.11.45) In : FKK I (1945) S.236
- 4) St. Franziskus und das Abendland. In : Das Erbe im Feuer. Betrachtungen und Rufe. Freiburg 1946 VII
- 5) Innozenz und Franziskus. In : Herrscher und Heilige. Bd.4 Ausgewählte Werke in 4 Bänden. Köln u. Olten 1953
- 6) LW S.193
- 7) Franziskus (23.10.52) Freiburg 1953 1956
- 8) Bonaventura, Johannes Fidenza : Das Leben des heiligen Franz von Assisi. Freiburg 1956

- 9) Assisi. In : Schneider, R. : Geschichte und Landschaft. Frankfurt a. M. 1980
- 10) Schneider, R. : Tagebuch 1930-1935. Frankfurt a. M. 1983 S.336 以下カッコ内の数字は引用の頁数を示す。
- 11) この問題について、拙論「償いは果たされるか」(注1)で論じた。S.152ff.
- 12) Schneider, R. : Innozenz der Dritte. München 1963
- 13) LW S.86
- 14) Schneider, R. : Die Stunde des heiligen Franz von Assisi. Wedel 1946 本書のなかで名前は Franz, Franzisko, Franziskus のように異なって表記されている。
- 15) LW S.134
- 16) LW S.133f.
- 17) Schneider, R. : Verhüllter Tag. Freiburg 1960 以下本書を VT と略記する。
- 18) 『アッシジのフランチェスコ ひとりの人間の生涯』キアラ・フルゴニ著 白水社 2004年 S.252
- 19) 『アッシジの聖フランシスコ』J. J. ヨルゲンセン著 平凡社 1997年
- 20) 注18参照
- 21) Schneider, R. : Winter in Wien. Freiburg 1958 S.31f.
- 22) VT S.82f.